

1 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ある春の日暮です。

唐の都、洛陽(らくよう)の西の門の下に、ぼんやり空を仰いでいる、一人の若者がありました。

若者は名を杜子春(とししゅん)といて、元は金持の息子でしたが、今は財産をつかい尽くして、その日の暮しにも困る位、あわれな身分になっているのです。

何しろその頃洛陽といえ、天下に並ぶものがない、はんじょうを極めた都ですから、往来にはまだしつきりなく、人や車が通っていました。門一ぱいに当たっている、油のような夕日の光の中に、老人のかぶった紗(しや)の帽子や、トルコの女の金の耳環(みみわ)や、白馬に飾った色糸の手綱(たづな)が、絶えず流れて行くようすは、まるで①画のような美しさです。

しかし杜子春は相変わらず、門の壁に身をもたせて、ぼんやり空ばかり眺めていました。空には、もう細い月が、うらうらとなびいた霞(かすみ)の中に、まるで爪の痕(あと)かと思う程、かすかに白く浮んでいるのです。

「日は暮れるし、腹は減るし、その上もうどこへ行っても、泊めてくれる所はなさそうだし——こんな思いをして生きている位なら、いつそ川へでも身を投げて、死んでしまった方がましかも知れない」

杜子春はひとりさつきから、こんな取りとめもないことを思いめぐらしていたのです。

するとどこからやって来たか、突然彼の前へ足を止めた、片目すがめの老人があります。それが夕日の光を浴びて、大きな影を門へ落とすと、じっと杜子春の顔を見ながら、

「お前は何を考えているのだ」と、横柄に声をかけました。

「私ですか。私は今夜寝る所もないので、どうしたものかと考えているのです」

老人の尋ね方が急でしたから、杜子春はさすがに眼を伏せて、思わず正直な答えをしました。

「そうか。それは可哀そうだな」
老人はしばらく何事か考えているようでしたが、やがて、往来にさしている夕日の光を指さしながら、

「ではおれがいいことを一つ教えてやろう。今この夕日の中に立って、お前の影が地に映ったら、その頭に当る所を夜中に掘って見るがいい。きっと車に一ぱいの黄金が埋まっているはずだから」

「ほんとうですか」

②杜子春は驚いて、伏せていた眼をあげました。ところが更に不思議なことには、あの老人はどこへ行ったか、もうあたりにはそれらしい、影も形も見当りません。その代り空の月の色は前よりもなお白くなって、休みない往来の人通りの上には、もう気の早いこうもりが二三匹ひらひら舞っていました。

【芥川 龍之介「杜子春」より】

問1 —線部①画のような美しさ とありますが、これはある街の様子を表したものです。その街の名前を、文章から二文字で書き抜きなさい。

問2 —線部②杜子春は驚いて、伏せていた眼をあげました とありますが、杜子春は何に驚いたのか、最も適切なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 老人の急な尋ね方
- イ 往来にさしている夕日の光
- ウ 老人が教えてくれたこと
- エ 老人が杜子春の目の前から消えたこと